



動かなければ出会えない  
 語らなければ広がらない  
 聴かなければ深まらない

教育個人紙「ECHO」 第二五八号

発行・編集人 エコー教育広報相談室 武勝美

発行所 〒二五七・〇〇三 秦野市寺山五一九

Tel・Fax 〇四六三・八一・四二七六

発行日 二〇〇八年九月五日(創刊一九八五年五月二〇日)

## じよきの木 NO.100

### 日刊学級通信『やまびこ』の山田暁生さん 逝く

死者の魂は、生き残された者が如何に、彼らのことを  
 思い出すかによつて輝くのではないか。死者を忘れない  
 ということは、自分の原点を忘れないということである。

瀬戸内寂聴

7月28日の夜、やまびこ会代表の中野敏治さんから  
 メールが届いた。

本日、仕事から帰ってきましたら、山田暁生様の奥様  
 から手紙が届いていました。7月17日に永眠されたた  
 のこと。7月24日に家族のみで葬儀を行ったことの連  
 絡です。私はこの17日に山田先生を病院に訪ねていま  
 した。残念ながら面会はできずに帰ってきましたですが、  
 その日に山田先生が亡くなられるとは……。山田先生のお  
 かげで多くの方が同士としてご縁を頂くことができました。  
 その頂いたご縁を大切に、山田先生が残された

瀬台中学校に山田さんを訪ね、「学級懇談会のあり方」に  
 ついてインタビューし、『西中PTAだより』98号に次  
 のようにレポートした。

年8回の学級懇談会、読書会が月1回行なわれている  
 ことに驚く。PTA活動の基盤は学級懇談会。学級懇談  
 会の内容が学年委員会で討議され、そこから研修会や講  
 演会のテーマや内容、予算が決まる。子供たちのために  
 いくつもの話し合いの場を持っていることを知り、山田  
 先生から大きな宿題をもらったような気がした。

### 山田さんの『やまびこ』と『エコー』

眼差しが優しいように、心はいつも温かく、しかも情  
 熱的な山田さんだった。『エコー』が創刊20年を迎えた  
 とき、次のような大きな励ましをいただいた。

いつもECHOを眺ませていただきながら、全くのこ  
 無沙汰で申し訳ありません。

ECHO第215号(2004・5・1発行)を眺み  
 進めているうちに、「ECHOは創刊20年目には入りま  
 した」に目が止まりました。「そうか。20年か……」と、  
 しばらくこの控えめに記された見出しを眺め、創刊当時  
 のことなどを私なりにいろいろ思い出していました。

武さんはずっと新聞教育の実践をしておられ、その実  
 践では既に全国に知られた実践の第一人者でした。「新聞

ものを、ご縁を通して引き継いでいきたいと思っています。

日刊学級通信『やまびこ』を25年間書き続け、今年  
 3月まで「父母と教師のコミュニケーション」と相互理解  
 を実践する仲間会、やまびこ会」を主宰された山田暁  
 生さんが逝去された。享年72歳。

山田さんとのご縁は、1980年の神奈川県中学校新  
 聞教育指導者講習会で私の話を聴いてもらったことから  
 始まる。この講座の後、山田さんから次のようなたより  
 が届いた。

常に担任でありたいと願い、充実した学級活動の中心  
 に学級新聞をおき、ものをとらえる目を子供たちに教え  
 ていく。新聞づくりの技術ばかりに目が行っている今の  
 新聞活動に対し、武先生の指導する新聞には、教育があ  
 り、心がある。私の教育活動の原点は学級通信。頑張り  
 子供たちの姿を追いかけ、励ましていきたい。

1982年、勤務していた秦野西中学校の職員研修に  
 山田さんをお招きした。PTA広報委員会は町田市立成

教育のことなら武さんに聞けば何でも分る」と、新聞作  
 りを教育に取り入れようとしていた先生方はそう思っ  
 ていました。

「コミュニケーションを重視した教育」という点では私  
 も学級通信活動や保護者との対話活動に熱を入れていた  
 ものですから、東京と神奈川という別の地での実践では  
 あつても、自然とお互いに引き合うものがありました。

武さんに学校の研修会に呼んでいただいた時は先生の  
 多きにびっくりしました。確か80人を超えていて、研  
 修会場に入った時はあまりにも多いので、「ほかの学校の  
 先生方も一緒ですか」と聞いたのを覚えています。

私も、「ECHO」の題字下に書かれている「・動かな  
 ければ出会えない・語らなければ広がらない・聴かな  
 ければ深まらない」と思っていました。お互いの実践に  
 はこの思いが共通していましたので、「お、武さんやつて  
 るな」と武さんのためまね実践にずっと関心を持ち続け  
 ていました。

その武さんが「自分の思いを、自分の言葉で、誰の制  
 約も受けず、広く伝えていきたい」と、1985年5月  
 に「ECHO」を創刊。それを手にした私は猛烈に「自  
 分もこのようなことをやりたい!」と思ったものです。

しかし、現場は、全国的にも私の勤務校も荒れまくっ  
 ていたので、朝は7時前に出勤、帰りは夜11時過